



TITLE:

日米ワンデイセミナー開催が決まるまで - 「事務局日誌」 抄 -

AUTHOR(S):

CITATION:

日米ワンデイセミナー開催が決まるまで - 「事務局日誌」 抄 -. 静脩
1993, 29(4): 3-3

ISSUE DATE:

1993-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37185>

RIGHT:

処理能力は1万冊に満たず、本学の蔵書冊数500万冊にくらべると気の遠くなる数字である。かりに、奇跡的な事態が起きて、21世紀には追いつけるとしよう。たぶん、そのときには利用者の検索システムに対する要求は、主題検索などに関し現在よりも高度になっていて、もはや役に立たなくなっているのではないか。かぎられた予算と、減っていく人員のもとで、なにを仕事の中心におくか。省力化とは異なったシステムづくりの戦略が必要であり、そのもとでのみ具体的に考えることができるように思われる。

内容面にわたるエレクトロニック・キャンパス創造への試みも、いくつか報告された。全文もしくは抄録データベース作成の要望は、国際的にもかなりつよく出されている。ここでは画像情報がとりあげられ、本学図書館の行なった電子ファイリングシステムによる画像情報の送信実験にも関心が寄せられた。すでに報告書に明らかにされているように、送信実験そのものは技術的に成功したが、本文・抄録の複製、オンラインサービスともに著作権法に触れる問題であり、図書館と著作者の間のライセンス契約が必要である。あらたな法改正も待たれるところがある。このため、実験は足踏み状態におかれている。ライセンス契約については、国レベルの集中的処理機構（複写権センター）がようやく緒につきはじめたけれども、いまのところ全体として、技術の発達に社会制度が追いついていない。

資料の保存に関しては、今回はもっぱら酸性紙の劣化問題や、貴重書の保存・利用がとりあげられた。ここで浮かび上がってくるのは、図書の文化財としての性質である。図書は情報伝達的手段であるとともに、人類の文化遺産の性質をもっている。現状は、新しく鮮度の高い情報をいかに正確にすみやかに伝達するかに重点がおかれている。しかし、人類の文化をかえりみた場合、普遍的知識となった情報、古くて価値ある情報の伝達がいせつになってくる。それには、これらの電算化を推進することと並んで、もとの図書それ自体の文化財としての保存が要請されるであろう。たぶん、その部分では、図書館はいまの博物館に

似た機能をもって存続することになるのではなかろうか。

そのほか、いろいろと考えさせられるところの多いセミナーであった。他人さまに注文をつけるのは、自分の責任を棚にあげるようで気が引けるが、ルートの探索にさいしては、文系、とりわけ社会科学系の研究者が、もうすこしこの方面に力をさいて、教えてくださるとありがたいというのが率直な感想であった。

日米ワンデイセミナー開催が決まるまで

—「事務局日誌」抄—

平成2年2月7日

大学図書館国際連絡委員会（第24回）

- ・役員選出、副委員長館再任
- ・第5回日米大学図書館会議組織委員会を設置、京都大学は国立大学側委員として参加
- ・日米会議のほかにシンポジウム等の開催要請の提案

平成2年5月17日

第5回日米大学図書館会議組織委員会（第1回）

- ・日米大学図書館会議の日程、テーマ等を協議
- ・私立大学側がオープン参加の1日セミナーのような会議開催を要請
- ・国公私立大学図書館協力委員会等の組織で企画するなどの提案

平成3年6月20日

国公私立大学図書館協力委員会（第30回）

- ・日米ワンデイセミナー（仮称）開催のため実行委員会を関西地区に設置することを決定
- ・委員館は国公私立大各3館、計9館で構成

平成3年8月1日

京都大学がセミナー実行委員会委員館として東北大学と交代して参加

平成3年11月8日

セミナー実行委員会（第1回）

- ・役員互選、京都大学は主査代理
- ・日本図書館協会大学図書館部会と共催を要請

平成4年2月27日

日本図書館協会大学図書館部会長が、セミナーの名称に「第13回大学図書館研究集会」と併記することで、共催にすることを了承